

中地区の自然と歴史が学べる4講座を開講！



②



①



③



④

いこま歴史キャンパス～中地区編～ カリキュラム

- 5/28(日) ①講座「中地区の歴史点描-信仰・伝統・生活-」
(公財)郡山城史跡・柳沢文庫保存会研究員 吉田栄治郎 氏
②フィールドワーク
「生駒中部の植物-見どころとさがしかた」
奈良教育大学特任教授 松井淳 氏
- 7/30(日) ③講座「生駒の近代と鉄道」
京都大学人文科学研究所准教授 福家崇洋 氏
講座「中地区の仏像」
龍谷大学文学部教授 神田雅章 氏
- 10/14(土) ④フィールドワーク「中地区の近代建築と宝山寺」
奈良文化財研究所建造物研究室室長 大林潤 氏
畿央大学人間環境デザイン学科講師 前川歩 氏



④



第3号

発行
生駒市図書館
市史編さん係

歴史キャンパス今年度も開催
昨年度から舞台を中地区に変え、令和5年5月～10月にかけて、「いこま歴史キャンパス」中地区編を開催しました。講座やフィールドワークを通じて、中地区の歴史や自然を学ぶこの企画。全4回を通して延べ158人が参加しました。

①では往馬大社や郷墓など近世の生駒の歴史について、③では撮影所やダンスホールがあった頃の生駒の様子と宝山寺などの仏像に関する講座を実施。②では、宝山寺から生駒山上まで山道を歩きながら樹木や草花を観察した他、④では旧生駒町役場庁舎・宝山寺獅子閣を見学するフィールドワークを行い、参加者たちは熱心に講師の説明に耳を傾けていました。

「いこま歴史キャンパス」は令和6年度に南地区編を開催する予定です。詳細は広報いこまちなどでお知らせします。

史料調査こぼれ話

大正～昭和初期（村・町時代）の議会史料がたくさん保存されています

北倭村・北生駒村・南生駒村の3つの村から生駒町を経て生まれた生駒市。村・町時代の議会史料が今も多く保存されています。執筆者曰く「町村合併や庁舎移転などにより、大量の史料が破棄されることが多い中、これだけの史料が残されているのはとても珍しい」とのこと。これらの史料は当時のまちの様子を窺い知る貴重な手がかりとして、生駒市史の作成に活用していきます。

村・町時代の議会史料の一部 →



令和5年度の動き

各分野の専門の学識経験者等が参加し、総括的な事項を協議し意見を述べる「生駒市史編さん委員会」は第5回目の会議を実施。刊行計画の修正や本編の規格に加え、章・節(案)が出揃い、市史発刊に向け本格的な議論が行われました。

各分野で充実した調査を

5つの分科会では下記の活動を実施。自然分野の執筆者が7名加わり初会合を行った他、民俗分野勉強会など、分科会内でも専門分野ごとの活動が顕著でした。さらに中世・近世・近現代史の分科会が垣根を越えて長弓寺の史料調査を実施。史料・美術工芸担当者も活発に寺院調査を進めました。また今年度は、北倭村長 有山武兵衛所蔵史料の調査協力を得て、現在も調査継続中です。

各分科会の活動報告

古代史分科会

市内窯跡や出土遺物などの分析調査を行いました。

通年 古地図や史料・出土遺物・須恵器窯跡等の分析・調査

中世史分科会

生駒市に関する中世史料の検索や選定のほか、市内寺院での調査を行いました。

7月 長弓寺所蔵史料調査
通年 中世史料調査・選定

近世史分科会

1回の会議と市内所蔵史料の調査や市内寺社での史料調査を実施しました。

4月 無量寺所蔵史料調査
5月 称名寺所蔵史料調査
6月 観音寺所蔵史料調査
7月 山崎町所蔵史料調査
竹林寺・西教寺所蔵史料調査
5~8月 長弓寺所蔵史料調査
10月 安養寺・金法寺所蔵史料調査
1月 第3回近世史分科会

近現代史分科会

生駒市に関する史料調査やかつて市内に存在した福祉施設に関する聞き取り調査を実施しました。

4月 北倭土地改良区所蔵史料調査
5月 上田酒造聞き取り調査
7月 長弓寺所蔵史料調査
山崎町自治会所蔵史料調査
8月 奈良県立図書情報館所蔵史料調査
9月 商業関係史料調査
新旧住宅地図調査
10月 奈良県立図書情報館所蔵史料調査
11月 国交省・奈良県土木事務所所蔵史料調査
大阪府公文書館所蔵史料調査
高鷲学園関係史料調査
1月 近代・現代打合せ
通年 生駒市所蔵史料調査
明治~昭和発行新聞記事調査

文化遺産・自然分科会

1回の会議と分科会内でそれぞれの分野に分かれ打ち合わせや調査を行いました。

4月 小瀬町民俗調査
無量寺仏像調査
5月 道願寺・称名寺仏像調査
6月 萩原町民俗調査
観音寺仏像調査
第3回文化遺産・自然分科会
7月 自然分野打合せ
西畑町民俗調査
竹林寺・西教寺仏像調査
7・8月 長弓寺仏像調査
10月 安養寺・金法寺仏像調査
9~1月 民俗分野打合せ
通年 歴史的建造物詳細調査



▲上田酒造調査



▲安養寺調査



③



②



④

①講演のあとに行われた座談会のような様子 ②奈良芸術短期大学特任教授の前園実知雄氏 ③天理大学文学部教授の天野忠幸氏 ④近畿大学文学部准教授の新谷和之氏

生駒市史関連講演会 「文化遺産は語る 生駒の中世」を開催

とき 令和6年2月17日(土)

ところ 図書館市民ホール



講演会「文化遺産は語る 生駒の中世」鷹山家文書・北田原城・竹林寺」に、約120名が参加しました。中世史料会の3名が講師を務め、前園実知雄氏から「竹林寺の墓所から見た忍性の思想的背景」について、天野忠幸氏から「鷹山氏と戦国の大和」について、新谷和之氏からは「畿内戦国史のなかの北田原城」についてお話いただきました。

講演後には座談会を開催。講師3名が再度登壇し、参加者の質問に回答しました。最後に講師から生駒市史編さんに向けた意気込みを発表。なかでも「生駒を大和の国の端っことして書くのではなく、生駒市域（添下・平群）こそが近畿の中心であったという強い意気込みで書いていきたい」という言葉に会場から大きな拍手が送られていました。

今後ともさまざまな歴史イベントを行う予定です。詳細は広報いこまちなどでお知らせします。

生駒市史史料集 第1集 好評販売中！

<掲載史料>

- ・北倭郷土誌資料
- ・北倭村風俗志調
- ・奈良県風俗誌記載事項調
<北生駒村・南生駒村>

<販売場所>

市内5図書館・室、
市役所生涯学習課
生駒ふるさとミュージアム
(休館日や閉庁日は除きます)



価格
1,500円
(税込)

B5版
全274
ページ

市史編さんボランティアが 活躍しています

約20名のボランティアの皆さんが市史編さん室での史料の整理作業、翻刻作業、講演会でのイベント運営などに取り組んでいます。

Interview : こんな活動、やっています

中世史料の日誌や記録などを見ながらデータ化しています。生駒だけでなく近隣地域の史料や、なかには人の死を悼むような史料も。すべてを理解できるわけではありませんが、1500年代の昔の人も今の人と同じような気持ちで生きていたことが感じられておもしろいですね。

井門 ゆかりさん



編集後記

「辰」は、陽の気が動いて万物が振動するので、活力旺盛になって大きく成長し、形が整う年だそうです。史料集の構成・本編の規格も決まり、本格的に事業を進めています。辰年にあやかり、大きく飛躍できればと切に願っております。そのためにも皆様方の引き続きのご支援・ご協力をお願いいたします。

● 史料紹介 ●

生駒ダンスホール
と
「戦争ごっこ」

文：福家 崇洋

生駒市史執筆員
(近現代史分科会)京都大学
人文科学研究所准教授

史料名：『ダンス時代』（1933年12月号）（尼崎市立歴史博物館"あまがさきアーカイブズ"所蔵）

かつて生駒にダンスホールがあったことをご存知だろうか。場所は、びつくり通り商店街のアーケードをくぐりぬけた先の丘の上である。もとは「生駒倶楽部」という名で1930年4月に設置を公認されたという。モダン文化の象徴であるダンスホールが全国の都市部で流行つたのは1920年代後半以降である。関西では大阪が中心だったが、風紀取り締まりの強化とともに多くが消えていった。代わってまだ規制の緩かった兵庫で数多く新設され、奈良でも生駒に誕生した（内務省警保局『風俗警察概観』1934年）。生駒倶楽部はダンサーとジャズバンドを抱えて開館した。当初の経営は地元の反対もあって難航したようだ。しかし、しだいに地元の理解も得られて、1932年4月にダンスホールと改称して、経営も軌道にのりはじめた（大阪今日新聞社奈

良支局編『奈良県置県五拾周年誌』1937年）。

上に掲げた写真は、雑誌『ダンス時代』2巻3号（1933年12月）に掲載された「生駒ダンスホール」の様子である。「埃塵の都市大阪を離れて、清澄な空気と風光明眉な生駒の丘上に聳え立つクリーム色の建物それは有名な生駒ダンスホール」（同誌2巻6号）と紹介されている。さぞかし生駒で目を引く建物だったのだろう。生駒市オープンデータポータルサイトには、「生駒ダンスホール」の概観を伝える写真を確認できるが、営業中のホール内部の様子を伝える写真は珍しい。ほかにも『ダンス時代』各号には、生駒ダンスホールで働いていた女性ダンサーの肖像写真が数多く掲載されている。彼女らと踊るために、大阪から生駒に足繁く通った男性客も多かったと思われる。

他方で、1930年代は満

洲事変が勃発し、日本の国際的な孤立にくわえ、戦争の影響が庶民にも及び寄ってくる時代である。上記の写真も、じつは「戦争ごっこ」という名称で3日間にわたって開催されたものだった。あちこちに掲揚されている日章旗のもとで、女性のダンサーたちが水兵に扮してセーラー服を着て踊っているのが確認できる。満洲事変から太平洋戦争へいたるなかで、ダンスホールも苦境に追い込まれていったというのが『生駒市誌』の記述だが、むしろ警察当局の管理対象だったがゆえに、戦争という国策に適應しようとした姿勢を認めることができるのではないかと。満洲事変後には、生駒ダンスホール関係者の連名で軍援護の恤兵金108円が寄付されており（『官報』1757号）、「戦争ごっこ」も彼らなりの戦意昂揚の一環だったのかもしれない。